

高齢者大学文芸部 7月歌会

シヨートステイに夫の行きたる留守の間に急ぎも
ぎをり鈴生りの梅 中津 ツユ
どしやぶりに芥流れし迫間川梅雨空晴れて水音清
し 山城 雅子
激動の世のうつろひを耐へ来しに後期高齢者とい
は呼ばるる 山田 弘子
整理せし亡夫の背広に円札ありて言葉もあらずし
ばし見つむる 中川 愛子
通販の虜となれるわが家に食欲そそるカタログ届
く 山代 静子
梅雨晴れ間色鮮やかな紫蘇摘めば一日こよなき移
り香に染む 小池ミエ子
野のみどり山の緑を眺めつつ幸せ思ふ今日のひと
とき 中村トメ子
災害を多く地上にもたらして天は何をば告げむと
するか 宮本 幸子
恐らくは最後になるや病む夫に同級会の案内は来
たり 中原 光子
パノラマの如くひろがる山なみの裾野を飛び白
鷺数羽 安東 綾子



万句の里俳句会 6月句会

日々遠くなりて睡蓮咲く忌日
紫陽花を潤す雨のいと静か
明易や仮眠の出来る仕事待ち
永らへて孫の厄晴れ百合にほふ
十葉の闇をはみだす白さかな
花菖蒲一輪の部屋華やけり
狭庭今山梔子の香に溢れをり
石垣も歴史を語り菖蒲川
音立てて代田へ水の踊りゆく
梅雨入りして田毎に音の賑はへり
香り添へ友に一輪薔薇を剪る
筑後路は金の波揺れ麦の秋
高木 陽子
丸山美代子
岩木 敬治
打出 貞
隈部 輝子
田島 房子
加藤 妙子
北村 妙子
平山 邦子
宮本 雅子
林 まつ子
富田 幸子

肥後狂句桜会 例会入選句集より

ゆさぶつて 車庫で寝ますかお客さん 須藤 新生
ゆさぶつて 手応えのあるウナギ手甫 光堀 善教
子供の頃 あこがれは先生だった 小川 繁美
割れ目から ジーツと耐えて生きる松 窪田 明德
良か奥さん 馬鹿になりきつとんはなる 田中 孝幸
子供の頃 プールは菊池川だった 高倉 新米
半信半疑 この骨董は安すぎる 狩野 本六

泗水短歌会 6月詠草

艶やかに咲き誇りたるドクダミの白花香る裏畑の
藪 宮本 峯子
庭に咲くうす紫やオレンジのばらを飾りて夕餉華
やぐ 増田久美子
幼な日に両手に掬い遊びたる目高がいまは水槽に
売らる 大島 きと
梅雨晴れ間に植え替えしたる千日紅亡母の好みし
紅色やさし 吉安 永子
身勝手な私を包みくれたりし在りし日の夫とこ
ろ温し 福原美智子
五月雨の晴れ間の畑土しめり帯び息つく如くもや
ののぼりぬ 内田つね代
梅雨間近灰か紅帯ぶ大梅の葉がくれの実を朝陽は
照らす 高藤タツノ
父の日に娘が持ち呉れし白百合の甘き香の満つ佛
間一杯に 中山 定子
あかときの雨に濡れいる紫と白の花菖蒲静寂のな
か 長尾はるみ

せせらぎ俳句会 6月例会

桑の実の白き齒染めし遠き日よ 寺本 和子
風鈴の音に小犬の耳動く 服部 静子
沖繩に戦後は消えず慰霊の日 藤本 邦浩
梅雨晴れ間並ぶ干し物庭狭し 村山 数恵
吊り忍ぶ風にぐるりと巡りをり 五丁 義昭
長雨に枝を傾けて花石榴 内村 泊虹
一鍬を避けて耕す蟻の道 藤本アツ子
雨の日の道に危いかたつぶり
(中三) 渡辺 大寿
梅雨の雨一たんやんでまた降って
(中三) 渡辺 一史

肥後狂句水笑会 6月例会

歩こう会 老いらくの恋焚き付けた 神尾 迫水
歩こう会 喋らにや足はうっ止まる 清原 英坊
信じられん 裁判官がストーカー 続 義昭
大地震 言い当てた如起こった 井手 水光
見たかいた メタボ(は)とつくに過ぎとらす
歩こう会 杖の準備はできたかい 宮上 美由
歩こう会 鮎はやつたりもうろうたり 柏原 乗仏
歩こう会 アルコル会にきやーなって 中島 五女
平井 江彩

七城短歌会 6月詠草

ピカピカと紫の光り放ちつつサラダ玉葱軒端を飾
る 堀 甲子
耳掻きの先を思わす苗床の出揃う葉先に顔を寄せ
見る 木下 陽子
雨ありて頭かしげる大輪の紫陽花朝に安堵をもた
らす 岩津 涼子
離れ住む子の家に来ても草を取る我に吹き来る風
の涼しき 松岡ミチエ
梅雨晴れのしばしを雀ら電線を飛び交い揺らし囁
り止まず 斉藤 芳子
憩うとて来たる湯の里ふと見上ぐ玻璃窓に鞍岳迫
りてをりぬ 森 道子
誕生日に孫が呉れたるリュックサック転ばぬよう
にの言葉に胸うつ 池田カツ子
門柱の左右をつなぎある蜘蛛の糸の長きに足止め
られし 吉間 充子
馬鈴薯を傷つけまいと手掘りするコロコロコロと
豊作転がる 緒方 寛子
足病もう我を少女等リュックをば揺さぶり鳥の翔
ぶごと追越す 下川 つぎ

旭志文芸俳句会 6月詠草

カラフルな今で登校梅雨たのし
燕待つ古巣そのまま梅雨に入る 芹川のり子
畑道楠の新緑まぶしかり 東 芳子
馬鈴薯と女笥煮る母の味 郷 ミヤ子
忙しげに鴨来るや枇杷熟るる 芹川 蓉子
孫の手を伝う川蟹思案顔 水谷 ミネ
梅雨しとど稲妻雷鳴忙しく 中尾ヨシコ
出田みどり

